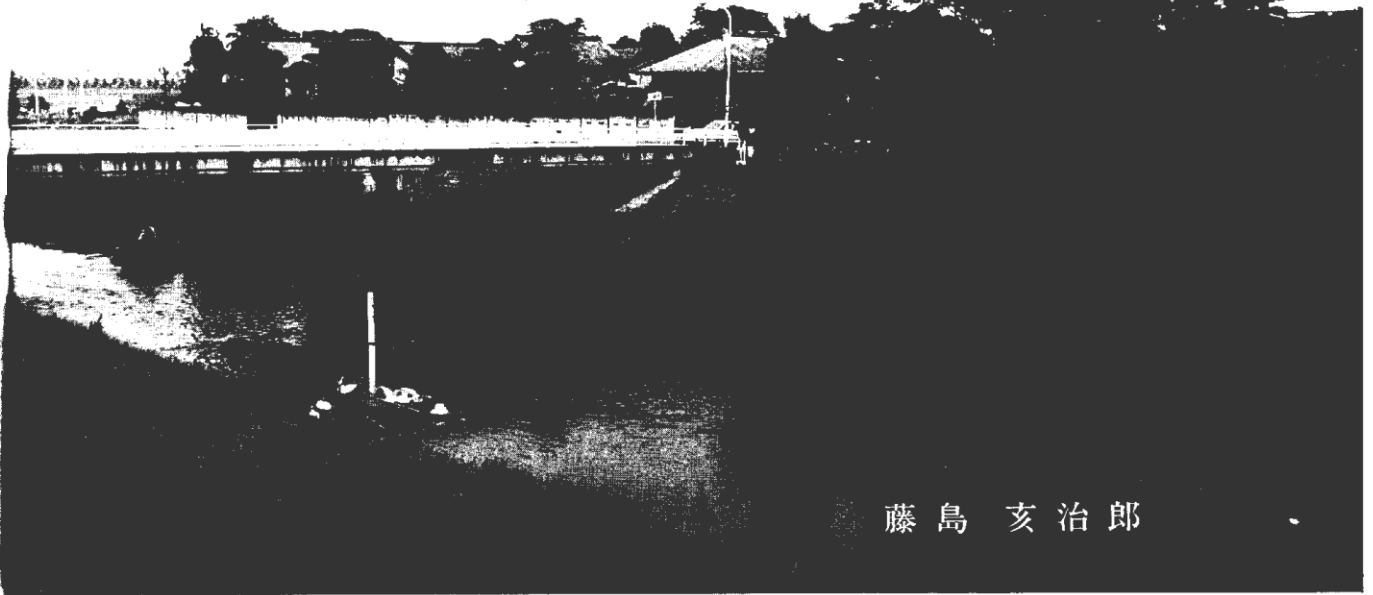


近世町家の展望 (1)

三階建てのある船問屋



藤島 亥治郎

1

私が東大生だった大正10年頃、小石川植物園から見晴らした町中に、上に行くにつれ広がってゆく四階建てを奇異な眼で見たものである。この家は大正6年に造られた田口家で、空襲で焼けて今はないが、もとより今の建築基準法では許されない。ところが明治大正頃の住宅ではよくこの様な木造家が建ったものである。ここに紹介する例もそのひとつである。

それは埼玉県上福岡市の旧船問屋、福田屋、旧星野家住宅である。

川越から江戸に流れる新河岸川の舟運のための舟着場のひとつとして、上福岡の河岸場も江戸期から明治大正まで栄えたことは、後述する藤島幸彦氏の史的展望に譲るが、とにかく、高さ5メートルの石垣に建つ三階建は城の天守を思わせる。ただし、ど

の階も3間半に2間半の面積だから、細長い箱を立てたような家である。三階から展望すれば、さぞかし河岸の親分として天下を取った気分だったろう。親分の名は星野仙蔵。剣士であり、代議士にまでなった豪快な気性の人のしたことらしい。明治31年ごろ主屋の後に続け建てた離れ屋である。

河岸場から西の台地にかかる道の北側に位置し、その屋敷地は東西に長く、約430坪。その東寄りにある道沿いの主屋は、西奥に門塀で仕切った小庭に望み、北奥に三階の離れ屋、その西に接して土蔵1棟が今も残っているが、昔は敷地のまわりに更に9棟の土蔵や、道沿いの物置で荷置場を囲っていた。主屋は明治初年と見られるから、そのころの繁栄した船問屋の姿はほぼ偲ぶことができる。

0 1m 2m 3m 4m 5m

2、東側立面図





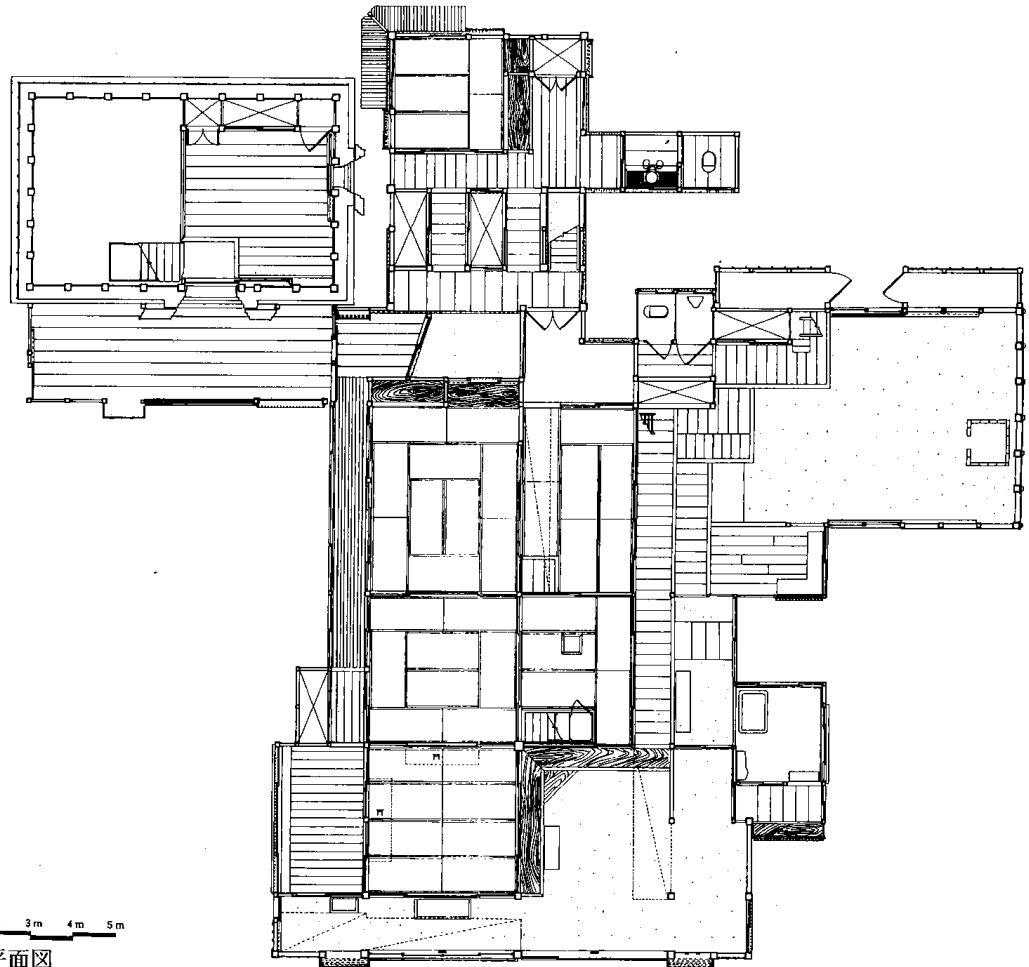
4

主屋は、庇1間通りをまわした二階建入母屋造棧瓦葺で、田舎じみた姿はいかにも関東平野の家らしい。間取りは図のようで、道沿いの土間・帳場から奥に座敷が6室あり、東は台所の棟に続く。良材で組んだ内部構造や、西奥の一の間の床・付書院の細

美な意匠や、床脇の大仏壇の精巧な仕上げは賞するに足りる。その奥の仙蔵が建てた三階建離れ屋には、氏の好みのままに工夫を凝らした室内意匠や、建具など、よくも悪くも、いかにも明治時代の雰囲気漂う。同時に精緻を極めた大工や、建具師の手腕は買うべきである。詳細は図の説明で知ってもらいたい。

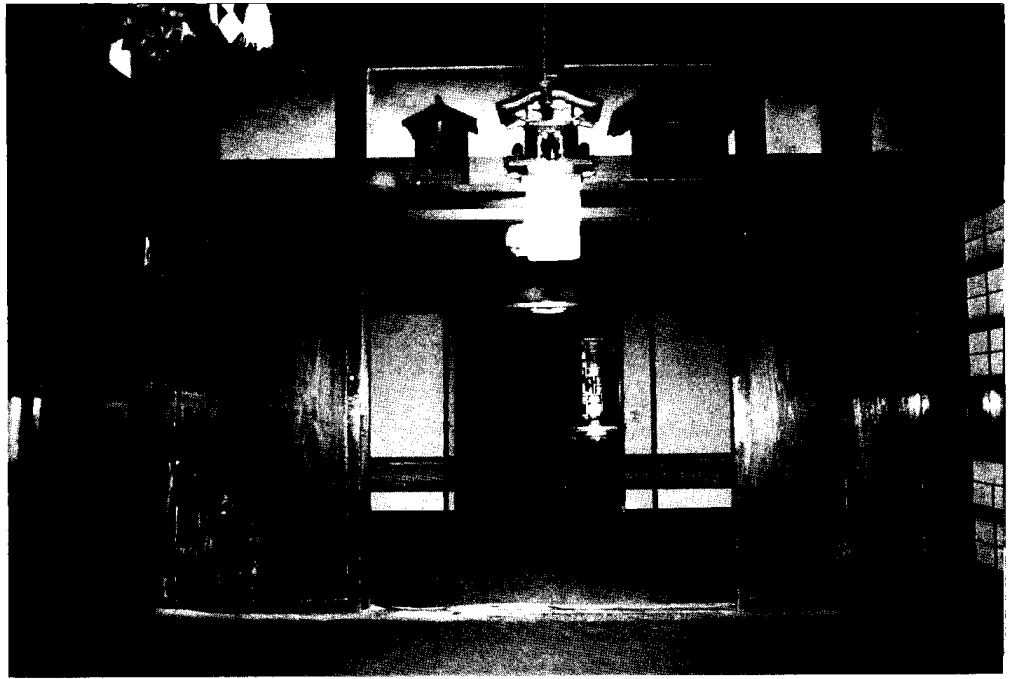
この家は持主も維持に堪えず、荒れたままで、現在市も県もその保存に苦慮している。だが、類例の少ない明治の船問屋として永く残したいものである。

(東京大学名誉教授)



3、1階平面図

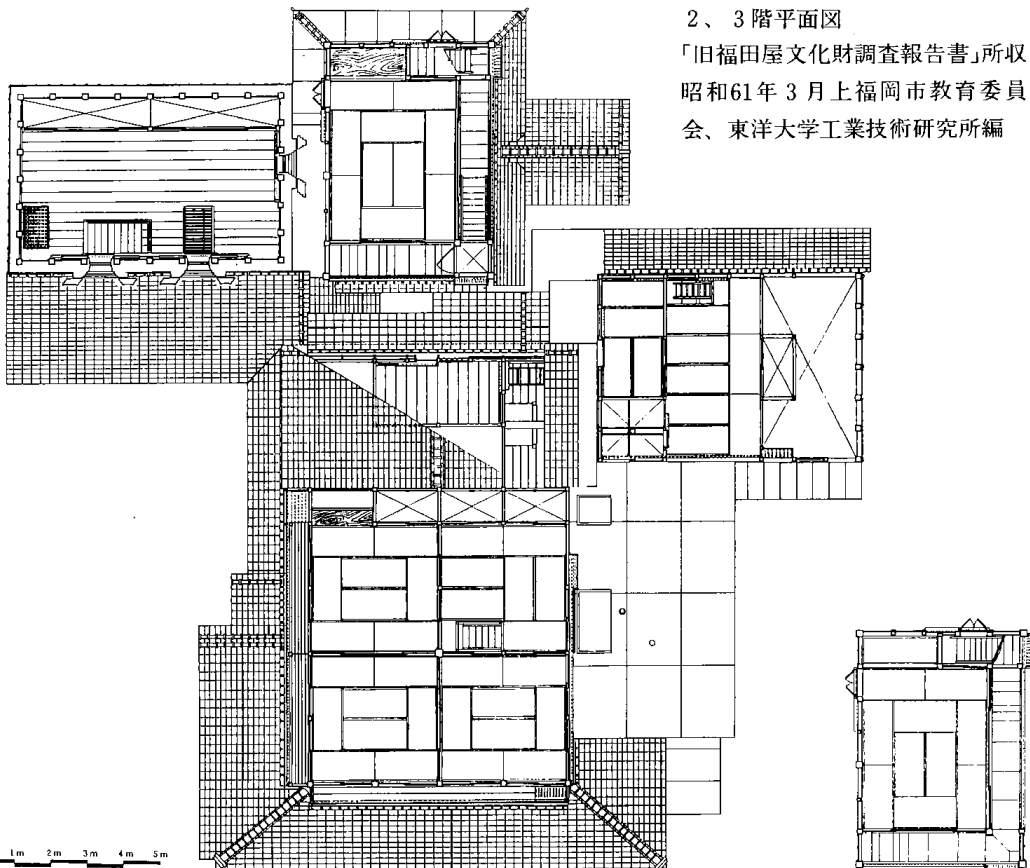
(1) 新河岸川の上福岡河岸場の現状。貨客の上げ下ろしの船着場、つまり河岸場はこの写真では川の手前の原で以前は岸沿いに17間、奥行4間の広さに土を堅めていた。橋は養老橋といい、戦前に描かれた油絵によれば、以前の橋は橋脚なく、一跨ぎに河を越えた反った木橋であった。対岸はもっと木が茂っていた程度である。河岸沿いには料亭、駄菓子屋、荒物屋などあり、台地の上には4軒の回漕問屋があって、幕末明治ころの賑わいが偲べる。



5

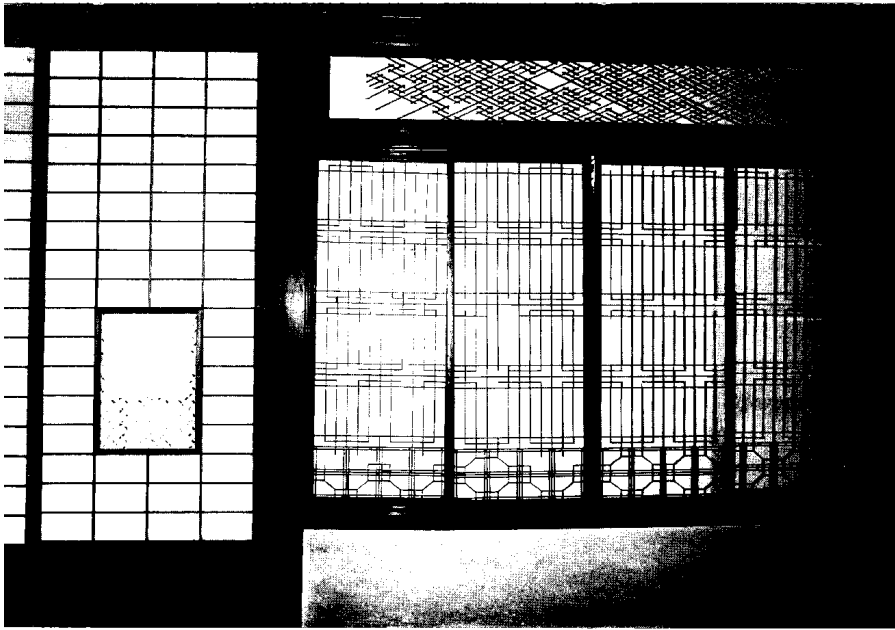
(4) 河岸から台地にあがる道の北側の福田屋の主屋で、その左奥に三階の離れ屋と、土蔵、その手前に中門が見える。主屋の下階左半分が帳場で、三畳の広さの床下を石で囲った部分に、金を無造作に投げ込んだとは豪勢なものである。

(5) 主屋店の間から二の間八畳、一の間十畳を見通したところで、神棚が正面のほか、左上部にもちらりと見える。



2、3階平面図

「旧福田屋文化財調査報告書」所収
昭和61年3月上福岡市教育委員会、東洋大学工業技術研究所編



(6) 主屋一の間床脇の平書院で、すべて細棧の意匠は中々新味がある。ことに欄間の菱格子はこの時代のものと思えぬ品格がある。

(7) 女衆部屋への梯子

この家で使われている女衆の部屋は主屋の二階奥にあるが、そこに行くにはこの図のように台所の板の間にかかった、このように急な梯子から、さらに小屋裏の緩い屋根を這うようにして登って行かねばならない。男衆部屋へは同じ台所の土間からふつうの勾配の梯子を登れば、広い中二階の部屋に行けるのに、婦女軽視も甚だしい。江戸中期の河内の大庄屋吉村家の女衆部屋もひどいものだが、そのような風習は明治になっても消えなかったと見える。

(8) 三階建の離れ屋の一階は四畳半で、狭いくせに太々しくグロテスクな床柱は何とも奇妙な存在である。それでも材はタガヤサンだというから恐れ入る。

しかし、この図で見ると、板欄間の葵唐草のすかし彫りには品格がある。

(9) 離れ屋の急な箱段を上がった二階屋敷は、十畳の東と南に縁側のある静かな部屋である。黒檀の床柱は見事であり、襖の秋草文様も繊細である。なお、床に掛けてある絵は、仙蔵氏が七福神と共に美人画を鑑賞しているという凝った図柄のものである。

6 7

8

9

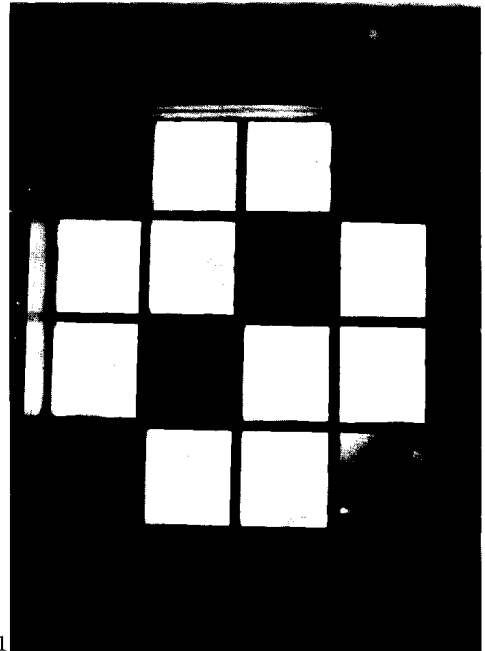


10

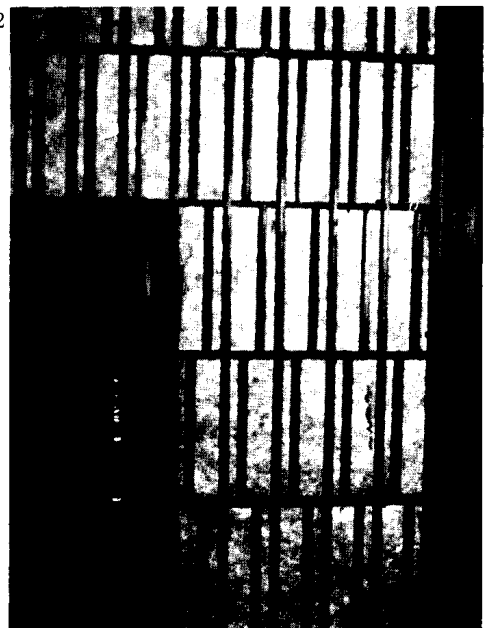
(10) 60度に近い急な階段で上る三階の十二畳座敷では、東から南への廻り縁から外を見下ろして、仙蔵氏大いに天下取りの気分になったのであろう。床柱も床框も紫檀の良材であるが、忠君愛国者であった彼のことだから、ここを宮中から下賜された両陛下の御写真を奉安した。ただ、その前方に宮中所用のものを模した赤地に金モールを縁取った幔幕を垂れ下げているのは、この座敷には違和感がある。

(11) 違和感の今一つは、二個所に穿った窓を市松文様に区切って、濃緑と乳白のギヤマンを散らして嵌め、その外側に渡した瓢箪形の鉄格子がほのかに透けて見えるという趣向だ。一寸モダンだが、どうもこの座敷意匠の統一を破っている。当時流行のステインド・ガラスで、これも仙蔵氏の趣味の一端を知ることになろう。

(12) 縁側との境目の障子8枚は創意に富んだ佳作である。中ほどのガラスは凝ったもので、その中央部を透き通しとした他は、松葉散らしを意匠した摺りガラスであるし、また、腰板に浅い浮彫で示した近江八景は中々の評判を買っている。しかし、私は細い横棧に細い横繁棧を吹寄状に組み入れたデザインの面白さと、それを透間なく、きっちりと組み上げた建具師の腕前に敬服の他はないのである。



11



12

新河岸川と船問屋福田屋

藤 島 幸 彦

住宅のある所には必ず人々の生活がある。そしてその生活に合わせて、住宅には、それぞれさまざまな歴史と文化が刻み込まれている。そうした歴史と文化には、現代に通じるものも少なくない。新しい住宅を思い描くとき、昔の住宅から教えられることも意外と多いものである。ここでは、「近世町家の点描」という視点から、商家を中心に町家をめぐる歴史と文化を、人々の生活を通して簡単にたどってみたいと思う。

埼玉県上福岡市大字福岡に残る旧福田屋住宅は、現在埼玉県に10戸ほどある3階建木造建築の中で、居宅用として使われていたほとんど唯一のものである。(他は旅館か蚕室である。)3階までの通し柱が使われ、木材の質の良さ・趣向を凝らした室内装飾意匠の数々・職人の技術の高さ等々、いずれも注目に値する。主屋は明治初年に、3階建の離れは明治30年代初頭に建てられたものと推定されているが、現在では、少々破損が目立ち始めており、早急の保存対策が望まれる。

この建物が歴史的に注目される理由は、単に木造3階建という奇抜な姿であるからばかりではない。この建物は、川越と江戸(東京)を結ぶ新河岸(しんかし)川沿いの船問屋の数少ない貴重な遺構なのである。また、3階離れを建てた星野仙蔵が、埼玉県の名士・文化人であったことも、この建物の特異性と無縁ではない。

新河岸川は荒川水系のひとつで、川越近くから流れ出し荒川と並行して流れ、かつては現在の和光市下新倉付近で荒川に合流していた。この川を改修し、河岸場(舟着場)を作り、川越から江戸までの舟運航路を開設したのは、川越藩主松平信綱であった。時に正保4年(1647)といわれる。当時、川越は政治的にも経済的にも、江戸幕府を支える重要な土地であり、農産物・肥料・薪などの集積地であった。これらの物資は、新河岸川舟運を利用して、大都市江戸へ運ばれた。この舟運の最盛期は天保期(1830~1843)以降といわれ、荷船ばかりでなく、早船と呼ばれる客船も江戸まで運航された。舟運は明治に入っても隆盛で、明治20年代

まで栄えたが、その後は、明治28年の川越鉄道(現在の西武新宿線)の開通など、鉄道の影響を受け始め、大正3年には川と並行して、東上鉄道(現在の東武東上線)が開通して決定的な打撃を受け、以後舟運は衰退の一途をたどった。

ところで、この新河岸川には、流域に河岸場が点在していたが、川越城下のいわゆる川越五河岸(扇・上新河岸・下新河岸・牛子(うしこ)・寺尾)に続く上流から六番目の河岸場が福岡河岸であった。福岡河岸ができたのは、安永2年(1773)であり、川越五河岸開設より約百年後のことであった。

ここにはかつて、福田屋の他、吉野屋・江戸屋と三軒の船問屋があり、物資の集配を取り仕切っていた。福田屋は荷物の積み降ろしをした河岸よりは、少し離れた新河岸川を見下ろすやや高台に建っている。主屋のまわりには倉庫が建ち並び、広い敷地には活気があふれていた。福田屋の北隣り、河岸と養老橋に面して吉野屋があり、福田屋と道を隔てた南隣りには江戸屋があった。この沿道は、今でこそ静かな住宅地だが、かつては福岡の中心街であった。

さて、3階建を建てた星野仙蔵について一言すれば、彼は明治4年生れ、明治27年11月、福田屋(星野家)第十代当主を継承した。それ以後彼は、大正6年に48歳で没するまでの間、福田屋当主として、政治家として、また神道無念流の達人として活躍したのである。仙蔵は明治29年9月に入間郡会議員に当選、続いて明治32年10月には、入間郡内の剣道関係者の絶大な支持のもと、最高点で県会議員に当選した。

さらに明治37年には、高田早苗が早稻田の学長に就任して、衆議院議員を引退したのに伴ない、その後任として衆議院議員となり、憲政本党に所属した。こうして政治家として活躍した仙蔵は、東上鉄道の敷設にも尽力した。明治44年11月根津嘉一郎らを発起人として、東上鉄道株式会社が創立されると、仙蔵は百株を引受けている。東上鉄道は舟運の息の根を止めるものであったが、仙蔵は当時すでに舟運の時代が終わろうとしていることを敏感に感じ取っていたのである。

仙蔵が3階建の離れを建てた明治30年代初頭は、彼としては十代目を継承して、郡会議員となり、意欲的に活動を始めた時期であったが、一方では舟運が衰退へ向かい始めた時期でもあった。仙蔵は3階建離れ建築にあたって、船問屋の当主としての誇りと、剣術者・名士・文化人としての気宇大きさを示そうとしたのかもれない。

(早稲田大学助手)